

# 初期蕉門撰集における構成意識

——『俳諧次韻』『冬の日』を中心に——

本 間 正 幸

一、  
鶯の足キシハキ雉脛キシハキ長くツツ継添ツツて  
這ツツ句ツツ以ツツ「ツツ莊ツツ子ツツ」可ツツ見ツツ矣ツツ

桃青  
其角

(桃青編『俳諧次韻』、一の巻発句・脇)

延宝九年、京の『諧七百五十韻』(信徳編、延宝九年刊)に二百五十句を接ぎ足し千句満尾を逐げる名目のもとに板行された『俳諧次韻』は、このように「て」留発句と注釈形式に擬した脇という破格な表現で幕をあける。

書名の「次韻」とは、先行する漢詩の韻を同じ順序で用いて詩作することを意味するが、ここは信徳一派の流れを継承することをその一語に象徴させたものであろう。それは砥粉色の表紙に貼付された「諧七百五十韻。二百五十句。江戸」  
「俳 諧 次 韻 桃青」という題簽、あるいは巻頭の表題に繰り返したわれていることでもある。

表題

晋、伯、倫、傳、酒、徳、頌、

樂、天、繼、以、酒、功、讚、

青醉ツツ之ツツ續ツツ信ツツ徳ツツ、七

百ツツ一ツツ十ツツ韻ツツ、二十ツツ句ツツ

挨拶を爰てハ仕たい花なれと

又かさねての春もあるへく

(正長)  
(常之)

最後の二句は『諧七百五十韻』(以下『七百五十韻』と略称)第八の句の花・揚句をそのままの形で引用したものであるが、従来「鶯の足」の「て」留の作意は、この二句を発句にかかると「詞書のようにするし」(『俳諧大辞典』明治書院 昭58・25版)、その詞書を立句・脇、発句を第三に見立てた趣向として解釈されている。

「継添て」という第三の「て」留であることからわかるように、この句は発句の体ではない。すなわち正長の句いの花(花なれど)の句を立句と見立て、春三句の約束に従ったのである。

(日本古典文学全集32『連歌俳諧集』小学館 昭57・9版、中村俊定氏稿)

確かにこの見解に立てば、発句を第三の句格で結んだ破格を免れる

のみならず、春一句捨ての式目違反（発句は雉△増山井二月）で春。脇が無季）も、詞書から数えて春三句の常式にかなうことになる。他の巻の発句が皆『俳諧次韻』（以下『次韻』と略称）興行時の季語（秋）を用いているのに反し、春の季語を詠み込んで説明もつくとともに、『七百五十韻』を驚、『次韻』を雉に見立てて両者を接ぎ合せる意志を表わした句意だけでなく、詞書と発句の形式においても集のテーマが反芻されていることが明らかとなる。まさに卓見といえよう。

阿部正美氏は『芭蕉連句抄』第三篇（明治書院 昭49）において、この桃青（芭蕉）の意匠を汲んで、『七百五十韻』第八と「驚の足」五十韻を実際に接合した形のテクストを作成しているが、これは逆に桃青の意志から離れ、『次韻』一集の世界を損なう結果となつていふように思われる。詞書と発句に込められた意匠は、その形式にとどめられてこそ意義が見いだせるものだからである。この時期の桃青にとってそれは俳諧性発露の手段として重要な位置を占める趣向であった。

『次韻』同様、詩句を詞書に代用した例は『虚栗』（天和三年刊）にもうかがうことができる。

憂方知酒聖  
貧始覺錢神

花にうき世我酒白く食黒し

芭蕉

詞書は白楽天「江南、謫居十韻」の文句取り。芭蕉以外にも類例は同集に多く見られるが、この先蹤は、寛平六年、宇多天皇の勅命により撰進された『句題和歌』（大江千里集）に見いだすことができる。

咽霧山鶯啼尚少（『白氏文集』卷十八「春江」）

・やまふかみたちくる霧にむすればやなく鶯の声のまれなる

花不忘帰因美景（同、卷十三「酬寄舒大見贈、去年夏」）

・花をみてかへらむことをわするは色こきかぜによりてなりけり

（本文は『新編国歌大観』第三卷、詞書の典拠は金子彦二郎氏著『平安時代文学と白氏文集 句題和歌・千載佳句研究篇』による）

『田舎之句合』（延宝八年刊）の嵐亭治助（嵐雪）序には「遠くきく、大江の千里は、百首の詠を詩の題にならひ、近所の其角は、俳諧に詩をのべたり。あゝ千里同腹中なる事を知ル」（古典俳文学大系5『芭蕉集 全』集英社 昭50・2版）の一文が見られる。これは其角の作風についての言説ではあるが、其角・嵐雪という蕉門の中心人物の腹中に『句題和歌』が存在したということは、とりもなおさず蕉門全体にそれが共通知識として意識されていた可能性を示唆していふ。ただし『句題和歌』が詞書の単なる和訳にとどまっているのに対し、『虚栗』では詩の世界を自句にやつし、一句を潤色する方法がとられていることを相違点として挙げる事ができよう。

これ以外貞享年間の句でも「蘭の香やてふの翅にたき物す」（『野ざらし紀行』…古典俳文学大系5『芭蕉集 全』）は『三冊子（赤）』の伝えるところによれば「かの難波の老人（宗因…引用者注）の句に「葛の葉のおつるの恨夜の霜」とかいふ句を前書にし」（『古典俳文学大系10『蕉門俳論俳文集』集英社 昭45）たものであったし、「旅人と我名よばれん初霽」（『続虚栗』 貞享四年刊）も同書によれば「諷（梅枝…引用者注）のはしを前書にして、書のごとく章として門人に送られし」ものであった。これらの逸話は当時の芭蕉の

好みを如実に物語っている。

実際の詞書と発句という限定を外せば、次のような例を取り上げることもできよう。

蒜ひるの籬かきとびに高たかをながめて  
 高たかのある花はなの賤屋せんやとよみにけり

(天和二年木因宛書簡・古典俳文学大系5『芭蕉集 全』)

「当地あち或人あるひと附句あり。此句江戸中聞人ちゆうもんじん無な御座ござ」と記されたこの付けが、二句を前書と歌の一節に見たてたものであり、その破格のさばきを江戸に類のない新風と誇ったものであることは周知のとおりである。「鷺の足」発句はこのように桃青が最も得意とする手法によって『次韻』の幕開けを飾ったものであった。

ちなみに、脇の注釈形式の句、これまた其角が好んで用いた趣向であり、桃青の好みにも合致したものであったと推察される。『田舎之句合』第六番左に、早く

俗よにいふうぶめ成なるべしよぶこ鳥(其角)  
 農夫のうと

と見え、『次韻』でも

納戸のうどの神かみを斎いし祭まつり  
 煉掃ねんそう之礼用のれいよう於お鯨くじら之脯のぼ  
 (揚)水  
 (其)角

女メ又メ玄シし龍頭りゆうとうの国くに  
 俗よのいふ鹿嶋かしまの海の底そこなるや  
 (才)丸  
 (其)角

と繰り返しまわっている。桃青も『俳諧向之岡』(延宝八年刊)に「於春々大哉春と云々」のような句を残している。

つまり『次韻』は『七百五十韻』を継ぐことを集のテーマとした

がらも、同時に桃青・其角それぞれに得意とする手法で『次韻』の独自性を主張してもいるわけだ。

『七百五十韻』と『次韻』は同年、しかも半年の隔たりしかもたずに寺田重徳方から刊行されており、本の仕立が酷似していることから、従来、分韻千句を巻く趣向が書肆も交えて事前に談合されていたとする合議説が唱えられてきた。筆者も基本的にその見解に従うものではあるが、接ぎ足すという意図は趣向の位相にとどまるものであり、両集を実際に接ぎ足す試みではないことは明確にしておく必要がある。『七百五十韻』は集の首尾に、日常会話的表現ではあるが江戸俳壇への挨拶を盛り込み、集としての円環を閉じているし、『次韻』巻頭はその流れを継承することを表しながらも蕉門の独自性を主張していることから、両集はそれぞれ別の個性をもった撰集と見なすべきであろう。『次韻』の場合、巻頭に示された桃青の意図ならびに表現が、後の巻で其角・揚水といった連衆によって反芻され、集のトーンが醸成されていることから、連衆連には『七百五十韻』に実際に接ぎ足すことよりも、むしろそれをテーマに集全体を構成しようとする意識の方が強く持たれていたように推察されるのである。そしてそのような観点に立てば、先の巻頭句はまさに集の象徴とも言うべき位置に置かれることになる。

このような集の枠組みへの配慮は同時代に類を見ない『次韻』の特色と言うべきものであり、とりあえずはそれを手掛かりに『次韻』の世界に参入することにした。

二、

鷺さぎの足あし雉けい脛しん長くながく継添つぎして

桃青 (発句)

① 這一句以莊子可ヲ見ル矣  
 花に照るヲ太神宮ノの寄特也  
 幣ヲに巢ル作ルる詔ノの鳥  
 馬ニにきけといふ  
 其角 (脇)  
 (桃) 青 (句の花)  
 (其) 角 (揚句)

五文字をこたふ

② 春澄にとへニ稱負鳥といへるあり  
 ことし此秋京を寐レ覺テ  
 葉傳ヒテ寸龍花ニに登リるか  
 如泉法師カ春力アリ  
 其角 (発句)  
 才丸 (脇)

③ 世ニ有テ家立ハは秋ノの壁中ノ哉  
 餘興  
 揚水 (発句)  
 桃青 (脇)

④ 附贅一ツ愛ニに置ケリ曰ク露  
 無用ノの枝ヲを立シ犬蘭  
 揚水 (発句)  
 桃青 (脇)

今、集の配列順に番号を施してみた。まず一の巻(五十韻)を意味する①発句と余興(四句)を意味する④発句が、ともに『莊子』駢拇篇を踏まえた表現で前後照応が図られていることがわかる。①は「鳧、脛、雖、短、續、之、則、憂、鶴、脛、雖、長、斷、之、則、悲、故、性、長、非、所、斷、性、短、非、所、續、無、所、去、憂、也」(『莊子』腐齋口義、寛永六年刊)の部分、林注では「長、短、出、於、本、然、之、性、長、短、性、所、安、無、憂、可、去、也」と説かれる寓言を讀し「七百五十句・二百五十句の長短はそれぞれの本然之性かも知れないが、鳧の足ともいうべき『七百五十韻』に我々雉の足ともいうべき『次韻』をあえて接ぎ足し千句となそう」と謙退したものであり、④も「駢、拇、枝、指、出、乎、性、哉、而、修、於、德、附、贅、懸、疣、出、乎、形、哉、而、修、於、性、多、方、乎、仁、義、而、用、之、者、列、於、五、藏、哉、而、非、道、德、之、正、也」

是、故、駢ヲ於足ニ者、連ニ無用ノ之肉ヲ也。枝ヲ於手ニ者。樹ニ無用ノ之指也也」を踏まえ「この余興は『次韻』としては形二出タル(体についでできた)ものではあるが、余興を持たない『七百五十韻』を自然な生まれつきとするならば、やはり性ニ修レル余分なものだ」と卑下したものである。なお、余興の残り二句もそれぞれ『莊子』を踏まえて『七百五十韻』への挨拶を述べている。

また、①②それぞれの巻についても発句・揚句で首尾照応が図られていることがわかる。傍線のように、①は発句で鳧・雉、揚句で詔の鳥と鳥で呼応し、②は発句で春澄、揚句で如泉法師と『七百五十韻』の連衆名で呼応している。『校本芭蕉全集』第三巻(角川書店 昭38)の解釈によると、『七百五十韻』の序を書いた春澄、巻軸の巻(第八)の発句を詠んだ如泉が、その順序どおり発句・揚句に引用されているということである。

ここで、①に関してさらにはさらに句意の面でも首尾が照応していることに注意したい。冒頭でも述べたように発句が、『七百五十韻』を「鳧の足」「次韻」を「雉脛」に見立て、『七百五十韻』に「次韻」を接ぎ足す意志を表わしているのに対し、揚句も『七百五十韻』を「幣」「次韻」を「詔の鳥」にたとえ、やはり『七百五十韻』に「次韻」が寄生することを表わしている。両者とも何かに何かをくつつけるという表現で照応が図られているのである。揚句の「詔の鳥」という耳慣れない鳥は、『七百五十韻』連衆の春澄が桃青と同座した『江戸十歌仙』(春澄編、延宝六年刊)所収「塙にしても」歌仙の揚句を踏まえたものであろう。その歌仙もまた傍線のように鳥で首尾呼応らしい形がとられている。

塩にしてもいざことづてん都鳥  
只今のぼる波のあぢ鴨

桃青 (発句)  
春澄 (脇)

さほ姫のよめり時分も花過て  
古巢にかへる仲人の鳥

(似)春(句の花)  
(春)澄 (揚句)

春の女神を京から江戸に嫁入らせるといふ句の花の句意は、『七百五十韻』の立句「江戸桜志賀の都はあれにけり 信徳」に込められた挨拶に通じるものであり(いづれも江戸俳壇への期待を裏に秘めている)、揚句でその、両俳壇の「仲人の鳥」を称して「古巢に」帰った春澄の句を踏まえ、「太神宮」(『七百五十韻』)の神力によつて、その神託を告げる『託の鳥』(『次韻』)が幣(『七百五十韻』)に新たな巢を作ることになった」としたものであろう。「託」はコトヅケとよむ可能性もあるが、辞書類にツグの訓があげられることから、コトヅケとよむ従来の説に従うことにする。ただし、これを『莊子』蓬生篇の「有<sub>二</sub>孫休<sub>一</sub>者<sub>三</sub>踵<sub>二</sub>門<sub>一</sub>而託<sub>三</sub>于扁慶子<sub>一</sub>曰<sub>二</sub>」によるものとするのは誤りであろう。『莊子』に強いて結びつけるまでもなく、前句の「太神宮」から託宣の縁で持ち出されたものと解釈できる。託宣を託宣と書く例は辞書類にも多く掲出されている。<sup>(2)</sup>この句を詠んだ其角は『江戸十歌仙』の座に列席してはいないわけだが、同歌仙第三・四句目の

川淀の杭木や詢のつたふらん  
千年になる毎みとり也  
千とせをくさる水の埋木  
葉傳ひて寸龍花に登るか

(似)春  
(桃)青  
(其)角  
(桃)青  
(次韻)「春澄にとへ」百韻)

の付けにおいて桃青を誘発している。<sup>(2)</sup>発句で春澄の名を持ち出したところと合せて、その歌仙に参加こそしなかったもののその詩情を踏まえることで、桃青ならびに『次韻』一座を盛り立てているように読める。<sup>(3)</sup>

其角の揚句はそのようなかつての座を踏まえているところに意義があるが、もうひとつ何かに何かをくつつけるという表現で桃青の発句に唱和し、照応を図ったところにも功績があると言えよう。改めて『次韻』を眺めわたすならば同様の表現は随所にちりばめられ、集のトーンを形成していることに気づく。<sup>(2)</sup>の句の花は『七百五十韻』を葉、『次韻』を寸龍に例え、『次韻』は『七百五十韻』を伝わって(つまり『七百五十韻』にくつついて)、俳諧の花にまで到達するか」としたものである。<sup>(4)</sup>発句・脇も『次韻』を犬蘭、その余典を附贅・露・無用の枝に例え、『次韻』というつまらないものにさらに余計なものがくつついた」と卑下したもののだが、「似て非なるもの」「まがいもの」(前田勇氏編『江戸語の辞典』講談社学術文庫 昭54)の意をもつ犬の字を冠することによって『七百五十韻』を正真正銘の蘭として持ち上げていることにもなる。

③からは座典性以上のものを汲み取ることができないが、このように配慮された撰集は同時代に類を見ないものだったといっている。  
試みに『次韻』の前年刊行された『江戸宮筍』(心友編、延宝八年刊)を例にとってみよう。伊勢俳人・心友が江戸東下の際、地元俳人達と興行した連句を取っており、挨拶性が前面に表われた集であることを期待させる。が、その内容たるや

そなたの春守武にても知れけり

曲言(第一百韻発句)

大将の器量御句ひの梅

心友

華に行いせ迄無事の左右きかん

曲(言)

青陽久に神風館の秋

露(言)

のように、連句の首尾に挨拶を盛り込んではいないもの、「守武」

「いせ」「神風館」、あるいは「江戸調和宿(第二百韻発句)・伊勢曆(名所方角)(第三百韻発句・揚句)・「浅草苔」「露の字言の字」(第四百韻発句・揚句)など、江戸・伊勢、もしくは連衆にゆかりの言葉を雑然と裁ち入れた日常会話的表現の寄せ集めにすぎない。

もうひとつ『蛇之助五百韻』(常矩編、延宝五年刊)を例にあげ

るならば、集前半の常矩独吟四巻の発句を後半の重似独吟が詞書の中に文句取りするという趣向が凝らされている。しかし、これも二人の独吟を取り合せて程度の印象でしかなく、集全体への配慮はまだ見られない。

そもそも談林俳書一般の表現は、「談」林「独活有か故愚等盤石にあぐむ 同(松永)」『談軒端の独活』「冥途にても」歌仙揚句、延宝八年序)のように、巻軸に書名を詠み込んで祝言とする程度のものでしかなかったのである。

『次韻』の前年(延宝八年)、桃青一門の旗揚げの意味を込めて刊行された『桃青独吟廿歌仙』も、これらと同レベルにとどまっている。歌仙によつては、

・蝨と成て晝寐の心栩栩然たり

・春莊子にして又栩栩然たり

(巖泉独吟発句)

(同 揚句)

のように『莊子』の表現によつて首尾呼応をはかった例も見られる

が、集全体にわたる配慮はやはり見いだせないし、表現としても

「桃青の園には一流ふかし」(嵐蘭独吟揚句)のような座興的なものがほとんどを占める。したがって集として比較した場合には、大部な『桃青独吟廿歌仙』よりも『次韻』の方が強い印象を与えたであろうし、実際その姿勢は三年後に刊行される『冬の日』(荷今編、貞享元年刊)にも受け継がれることになるのである。

三、

『冬の日』の構成については、すでに島居清氏(『冬の日』の構成について、『親和国文』第14号、昭54・12)に研究成果が認められるので、まずその説を紹介することにしたい。

笠は長途の雨にはころひ帯衣はとまり／＼のあらしにもめたり

侘つくしたるわひ人我さへあはれに

おほえけるむかし狂哥の才士此

國にたとりし事をふとおもひ出て

申侍る

狂句こからし身は竹斎に似たる哉

たそやとはしるかさの山茶花

おもへとも壯年

いまたころもを振はず

はつ雪のことしも袴きてかへる

つえをひく事僅に

十歩

つゝみかねて月とり落す霽かな

杜國(発句)

芭蕉(発句)

野水(脇)

野水(発句)

楚水(発句)

十歩

杜國(発句)

なには津にあし火燒家は

すゝけたれと

④ 炭賣のをのかつまこそ黒からめ

田家眺望

重五（発句）

⑤ 霜月や鶴のイ々ならひゐて

冬の朝日のあはれなりけり

水干を秀句の聖わかやかに

山茶花句ふ笠のこからし

野水（名残りの裏五句目）

うりつ（揚句）

荷兮（発句）

芭蕉（脇）

⑥ いかに見よと難面くうしをうつ臈

羽笠（発句）

説明の便宜上、これも配列順に番号を施してみた。氏によると⑥の意味を持つているということである。③は悠々風雅を樂しめない境涯を詠むことで④に唱和した形をとっており、⑤⑥は共に座興的な内容で挨拶しているものの、⑥に「つま」の語で能楽の四番目物（連句でいう恋の座）の趣向を利かせており、⑥発句では編者其角が連衆全員の姿を「イ々ならひゐて」と述べて挨拶とし、揚句では⑥の発句をうけた首尾対応がなされているとのこと。加えて⑥追加もそれぞれ芭蕉への錢別吟となっており、集全体が整然と配列されていることを指摘されるときにも、編者の名は荷兮となっていて、そこに芭蕉の指導推敲が加えられている可能性を強調しておられる。大きく取りまとめたために氏の意を尽くせなかつた部分があるかもしれないが、詳しくは氏の論文に譲ることにしたい。ここでは右の説を踏まえた上で、さらに③⑥までの発句がすべて連鎖してひとつの模様を織り上げるように配慮されている事実を付け加え

ることにしたい。

例えば③、これは氏が述べるように、「隱道の志」（越人著『俳冬日集種花翁句解』享保四年頃成）を詠んだ④に對し、それとは逆の生活人の歎きを向かわせたものである。常日ごろ「ころもを振」つて隠士の列に加わりたい思いを抱きながらも、年いまだ壯年にして深く踏み切れないもどかしさが表白されているのである。

⑥はこの壯年の人物にさらに年をとらせ、杖をひく老人（杖突—老人・『類船集』延宝四年刊）として点出するとともに、⑤で表わされた芭蕉との境遇の違いを今度は器量の違いとして表わしている。一句の作りはいまだ談林の寓言調を踏襲しているものの、「霽」を月を抱える老人に見立て、時雨一般に詠まれる「追風ににげ足はやし北しくれ 中尾友之」（『かくれみの』延宝五年序）のような足走な姿を逆にとらえたところはこの句の新しさとして評価できよう。これに付けた脇は「こほりふみ行水のいなづま 重五」という句であるが、この「水のいなづま」は発句の月、もしくは「つゝみかねて…とり落す」という表現から、「陽炎稲妻、水の月」という、手に取ることでできないことを言う諺（謡曲「熊坂」にも例あり）を介して、水たまりのひび割れた水に宿る月光を「水の月」ならぬ「水のいなづま」としたものであろう。これも水のひびを稲妻が踏み破ったかのように言いなした寓言調の句であるが、これを踏まえた句が、

芭蕉翁をおくりてかへる時

この比の水ふみわる名残かな

芭蕉士を送る

杜国 『春の日』 貞享三年刊

・稲妻にはしりつきたる別れかな

釣雪

『阿羅野』巻之七・旅（元禄二年序）  
 のような饒別吟に見られることから、稲妻（発句では月）を芭蕉に見立てた座興と解される。頼りない足どりの時雨（名古屋俳人）に、包もうとしても包みきれない月、あるいは迅速な稲妻（芭蕉）を配したところに両者の器量の違いを寓していると解釈できる。

さて、㊹は㊸の老人から炭壳を連想したものであるが（翁―炭壳…『類船集』）、妻を点出したところは、島居氏の述べられるような変化を持たせたものであろうし、それが結果として連想の枠を一步逸脱した新しさをもたらしてもいる。

㊸は編者自ら発句を勤めることで挨拶の総括としたものであるが、先の㊹と、この㊸はひなの景を詠むことで連鎖しているとともに、句形の面でもつながりを見せているのである。

㊸の発句・脇二句は『三冊子（白）』によれば「心詞ともに俳なし。ほ句をうけて一首のごとく仕なしたる処俳諧なり」ということであるが、脇の韻字止めを「けり」と詠み切ったところ、また「田家眺望」という歌題仕立の詞書を付したところ、まさに二句合せて一首の和歌に擬した趣向と解釈できる。鶴の歩むでもなくぼうぜんと佇む姿に、春まだ遠い冬の朝日を取り合せたところは新しいひなの風情が認められるが、句の作り自体は紛れもなく『次韻』のものである。付合がある既定の形式になぞらえるこの手法は、上野洋三氏（『次韻』の世界）・白石悌二・乾裕幸氏編『芭蕉物語』有斐閣昭52）によれば、もとは『七百五十韻』のものであるがそれを継承した『次韻』にも顕著な特色であるとのこと。とまれ、その中で荷兮が典故としたものは言うまでもなく前掲「鷺の足」発句であらう。

数ある俳諧の中でも発句を第三の句格で結ぶという破格は、この二句以外には存在しない。「鷺の足」については先述したが、この「て」留に關しては、芭蕉を迎えて過去の俳風を再現しようとする荷兮の誘発以外に想定すべき材料がない。

㊹にもこれと同様の手法が用いられている。「なには津にあし火焼家はすくけたれと」という詞書は『萬葉集』巻第十一「難波人草火焚く屋の煤してあれど己が妻こそ常めづらしき」(日本古典文学大系6『萬葉集』三、295)の上の句をほぼそのまま引用したもの。発句は下の句を、白楽天「賣炭翁」の「滿面塵灰煙火色、兩鬢蒼蒼十指黑」(『白氏長慶集』卷第四「明曆三年刊」)によって「黒からめ」としたものとと思われるが、詞書・発句合せて萬葉のもじり歌に仕立てたところは、やはり『次韻』の残滓と言わなければならない。

㊹は、㊸の「田家」から牛を連想し(田かへす・田中のあぜ―牛…『類船集』)、㊸で自分達を鶴に見立てていたものを今度は牛に見立て替えて、緊張の余り面が上げられないまま芭蕉との別れを迎えようとする心情を「難面く顔をうつ霧」と表したものである。

以上、発句はすべて連想の上でつながっており、恋の詞(人妻…『毛吹草』連歌恋之詞「寛永十五年序」)によって転換を図ったと思われる㊹以外の名古屋俳人の句は、すべて季語の中に冬の降物が詠み込まれてもいる。『温故日録』(延宝四年刊)は木枯を「誠に時雨露雪をもよほす風にて」と記しているが、ここも芭蕉の句の季語(ことからし)を契機に展開された趣向と考えられる。また㊹を除くすべての句にそれぞれ別趣の詞書が付されているが、これも㊹における詞書の趣向、あるいは天和期における芭蕉の趣味に歩調を合せたものと見なすことができる。



このような、芭蕉の句を基準に後の発句が付句のように連鎖していく趣向は『次韻』同様、当座の思いつきや、編集の過程で整えられたものではなく、おそらくは芭蕉も含めた連衆全員によって事前に談合されたものと考えられる。今、それを裏付ける見解をいくつか示してみよう。

○発句・脇と㊦名残りの裏五句目・揚句が同語反復によって照応していることは図の傍線部から明らかだが、宮本三郎氏（蕉風連句の月と花）：『蕉風俳諧論考』笠間書院 昭49）は㊦の句の花が名残りの裏二句目まで三句引き上げられている事実に着眼し、揚句があらかじめ用意されていたために山茶花と花の三句去りの式目に従ってその位置に引き上げることになったものと推測しておられる。これによって連衆達に集の首尾照応の意識が持たれていたことが明らかとなる。揚句を事前に用意するのは必ずしも珍しいことではないかもしれないが、これ以外に句順の面で、㊦・㊦までは、前の巻で脇を務めたものが次の巻で発句を詠む形が守られていること、さらには島居氏が前掲論文において一覽表で示されるように、第三・第四・第五・初裏の花・句の花・揚句にまで全体の句順・句数に配慮が施されているとするならば、事前に全体のラインアップなどが計画されていた可能性はいよいよ大きくなる。

そして、これも島居氏が推測されたことであるが、このような構成の手法は芭蕉の指導による部分が大きいと思われる。集の首尾照応は『次韻』にすでに試みられていたものであるが、『次韻』には見られなかった発句が連鎖する配列も『野ざらし紀行』において芭蕉自身が大いに發揮している手法であるからだ。貞享年間の荷今の句に芭蕉の作を踏まえたものが多く見られることに照合しても、芭

蕉の影響下に荷今が身を置いたことは推測に難くないであろう。

四、

〔…貞享甲子秋八月、江上の破屋をいづる程…〕

野ざらしを心に風のしむ身哉

武蔵野を出る時、野ざらしを心におもひて旅立ければ、

しにもせぬ旅寝の果よ秋の暮

（巻頭句）

〔前半〕

「卯月の末、庵に帰りて旅のつかれをほらすほどに、

夏衣いまだ風をとりつくさず

（巻末句）

〔後半〕

『野ざらし紀行』全体の構成が右図のように、巻頭句と大垣での「しにもせぬ」が照応するように作られ、それを境に前後に二分されていることはすでに常識と化しているが、白石悌三氏（「四季の構図」：『芭蕉』花神社 昭63）によると、さらに巻頭巻末両句の詞書も首尾呼応するように整えられているということである（ただし後者傍点部、泊船本にはなし）。氏は傍線部の文体の違いに前半部の精神の緊張と、後半部のくつろぎの反映を読みとるとともに、前半部・後半部の発句がそれぞれ対照的に作られているという見解も示しておられる。

また、個々の発句の配列がそれぞれ連鎖することでひとつの模様を織るように配慮されているという見解も、すでに高橋庄次氏（『芭蕉連作詩篇の研究』笠間書院 昭54）によって提示されている。

このような前後左右の緻密な配列によって、紀行文にはあたかも芭蕉の句同志が唱和し合うかのような空間が幻出しているわけだ。

今『野ざらし紀行』について詳細に検討する余裕はなく、別稿としなければならぬが、ここに至って『次韻』『冬の日』と試みられてきた芭蕉の構成に関する実験はその成果を取めたとすることができよう。

注

(1)この付けは単に前書と歌の形式を援用したというにとどまらず、「変と転を重ねずる連句本来の性質から、正真の花に対して桜のごとき同意のものを附けるのは避けるべきだと古来されてきた」(日本古典文学大系 46 『芭蕉文集』岩波書店 昭34、荻野清氏訳)式目に対し、「蕉」蕉ヲ付(けて)一物別意ヲ付分(つ)たところに芭蕉の自慢があった(濁子宛書簡「自慢之詞」。自らこれを「過・現・未に亘って類想のない附句の体」であり、「一生一代のすぐれた附句」(荻野氏訳)と評していることから自慢の程がうかがわれるが、この手法は『次韻』ですでに試みられたものである。

〔麻の葉に生る小鮒を打交て  
かた枝さすなる生の浦柚子〕

(桃) 青 (其) 角

付句は「生」を地名と解しての別吟である。

この四句後に芭蕉は「人死を待て生たへいなし 青」と再び同字を使用しているが、ひとつの懐紙に同字を多用することも式目的に望ましいことではない筈である。

芭蕉はさらに「虚栗」「花にうき世」歌仙でも同様の手法を繰り返している。

〔琵琶洗ふ雨よし朝の時雨よし  
朝にえげしをふるふ紙衣〕

一品 芭蕉

付句は「朝」を朝廷に解しての別吟である。

同字別吟ではないが、芭蕉は『次韻』において「枸杞に初音の魂鳥の魄」

(鶯の足)五十韻)のような言語遊戯も行っている。

『次韻』では外にも、「春澄にとへ」百韻、あるいは漢文訓読で句切りに用いる○を使用した「愛を捨子ヲ捨○毗盧遮阿毗羅味 青」(同前)など新奇な表現が展開されている。「筑地ある根。底に車引止。青」(同前)は宣命書をまねたものであるし、「渾沌翠に乗て氣に遊ぶ 青」(同前)は表記とルビのずれに俳諧性を求めたものである。

後の「鬚風を吹て暮秋歌ズルハ誰ガ子」(『虚栗』「憶老杜」)に展開され、以後「死の晩年に至るまで、この句法に心を留めてゐた」(久保忠夫氏「芭蕉の発句と倒装法」『連歌俳諧研究』第十二号 昭31・9)とされる倒装法も「月を暮夕芋の葉の片軒端 青」(『世に有て』百韻)のように試みられている。月と芋の葉を置き換えて「芋の葉を暮夕、月の(当タル)片軒端」とすれば、一見不明瞭な句意も明瞭となる。

以上、読者の耳目を驚かす新奇な表現こそ『次韻』において芭蕉が最も意を尽くしたものであったことが確認されるが、それらは表現に沈潜することによって、日常性を題材とし、口語の軽快なリズムを特性とする談林を凌駕しようとする一連の試みとして位置づけることができる。(2)同様のことが「世に有て」百韻の次の例にも指摘できる。

露鶏の羽かひの鷺ひよ〜と

(揚) 水

この「鷺」は従来、「莊子」齊物論篇の「鷺音」、もしくは天地篇の「鷺食」を踏まえたものとする。前者は『次韻』連栗の一人である才麿が『講東日記』(延宝八年刊)の序に引用しており、座の共通知識として存在したとは推測されるが、それを直接の典拠とするのは早計であろう。これも強いて「莊子」に結びつけるまでもなく、次の例に徴してこ

こはある程度慣用化した用字法と見なすべきものと思われる。

・提婆うしろに鷺飼つらん (鬼) 貫

(かやうに候ものへ青人猿風鬼貫にて候)真享元年作『鬼貫全集』

増補版・角川書店・昭46、岡田利兵衛氏翻刻)

・秋たつ風に鷺羽うつ

旧篇

〔敏士編〕『墨流しわだち第五』元禄七年刊…『国文学研究資料館文  
献資料部調査研究報告』第七号 昭61・3、雲英末雄氏翻刻)

(3) 『次韻』における其角の働きには見るべきものがある。注(1)の同字連続も其角がかかわっていたが、他にも「世に有て」百韻で芭蕉が「飛雨壺ノ跡ハ霞ニ空シキゾ」と送り仮名を片仮名で統一し、句末をゾと結んだ「抄物など詩句の講義口調」(島居清氏「芭蕉連句全註解」第三冊 桜楓社 昭54)で切り出せば、其角も「駒馬ノ進マザル鉢キラくシ」と同様の趣向で当意即妙に切り返しているし、

〔雀屋肩を客によびけらん  
慈悲十齋が閑つれく〕にして

〔桃〕青  
(其)角  
〔鷺の足〕五十韻)

〔扱もかびて箕子折たく秋しもぞ  
無銭居一士とて朝深き月

〔桃〕青  
(其)角  
〔世に有て〕百韻)

では、作り名によって芭蕉のイメージを演出してもいる。いずれも前句を芭蕉の境涯(前者は芭蕉を「雀屋」に見立てたものである)。

(4) 『拾遺和歌集』巻第十四・恋四には「なには人あし火たくやはすすたれどおのがつまこそとこめづらなれ 人まろ」(『新編国歌大観』第一巻 角川書店 昭58)の形でとられている。

(5) 其角も「元日の炭売十の指黒し」(『一樓賦』 貞享二年刊)のように同詩を踏まえた句を残している。

(6) ⑥の「霜月」は厳密には月名であるが、霜と鷗の羽が付合に挙げられる(『類船集』)ことから、一句の発想には降物の霜もかかわっていたものと思われる。

(7) 各巻発句の季語をみても、①②は十月、③④は十一月となっており、実際に巻かれた順序通り、もしくはそれに極めて近い形で配列されている。

ることが推測される。

(8) 手つから雨のわび笠をはりて

世にふるもさらに宗祇のやどり哉

芭蕉  
〔虚栗〕

しはし宗祇の名を付し水

笠ぬきて無理にもぬるゝ北時雨

杜國  
荷兮

〔冬の日〕「こからしの」歌仙

夜着は重し呉天に雪を見るあらん

芭蕉  
〔虚栗〕  
荷兮

雪の狂興の國の笠めつらしき

〔冬の日〕「つゝみかねて」歌仙

手洗ふ女 西行ならは哥よまむ

〔野ざらし紀行〕

ほととぎす西行ならは哥よまむ

〔春の日〕「春めくや」歌仙

馬に寐て残夢月遠し茶のけぶり  
山路来て何やらゆかしすみれ草

〔野ざらし紀行〕

ねぶたしと馬には乗らぬ葎草

荷兮  
〔阿羅野〕

など。